

目的 今日、衣服素材の織物・編物は感性的付加価値の高いものが望まれ、C.G.利用などにより、多種多様な色柄のパリエーションが展開できるようになった。しかし、それらはディスプレイや紙の限られた面積の平面に表現されたものであり、衣服として立体に構成された柄とは異なったイメージを持つと考えられる。本研究では、一般的に衣服の柄として用いられ、 패턴の構成が単純である水玉柄の、平面と立体におけるイメージの差異について把握することを目的とした。

方法 刺激として用いた柄は白地に黒の水玉柄であり、直径が5段階、密度が3段階の組合せにより、計15種類とした。平面試料として紙に印刷したものと、立体試料として綿布に型染してワンピースに縫製したものを、35mmカラーライドに作成した。それらの試料について20対のイメージ用語を用いて、SD法による5段階評定尺度を用いて調査した。被調査者は若年女子21名であり、得られた結果について因子分析を行なった。また、水玉柄の 패턴のパラメータに着目し、イメージを捉えた。

結果 因子分析の結果、主に第一因子として抽出されたのは「好き-嫌い」などの評価性に関する因子で、立体・平面の両者において共通であった。また、同様に水玉柄のパラメータと各形容詞対に対する平均尺度値についてみると、直径が大きいものほど「ラフな」、「情熱的な」、「子供っぽい」、「下品な」イメージを強く持っていることがわかった。第二因子として正に高く負荷した「派手な-地味な」、「強い-弱い」、「動的な-静的な」については、密度の高いものが大きい尺度値を示した。